

## なよ竹のかぐや姫 本文

今は昔、／竹取の翁といふ者ありけり。／野山にまじりて竹を取りつつ、／よろづのことに使ひけり。／名をば、讃岐の造となむ言ひける。／その竹の中に、／もと光る竹なむ一筋ありける。／あやしがりて、寄りて見るに、／筒の中光りたり。／それを見れば、三寸ばかりなる人、／いとうつくしうてゐたり。／

翁、言ふやう、／「我朝ごと夕ごとに見る竹の中に／おはするにて知りぬ。／子になり給ふべき人なんめり。／とて、手にうち入れて、／家へ持ちて来ぬ。／妻の嫗に預けて養はす。／うつくしきこと限りなし。／いと幼ければ籠に入れて養ふ。／竹取の翁、竹を取るに、／この子を見つけて後に竹取るに、／節を隔てて、よごとに／黄金ある竹を見つくること重なりぬ。／かくて、翁、やうやう豊かになりゆく。／

この児、養ふほどに、／すくすくと大きになりまさる。／三月ばかりになるほどに、／よきほどなる人になりぬれば、／髪上げなど左右して、／髪上げさせ、裳着す。／帳のうちよりも出ださず、／いつき養ふ。／この児のかたちの／けうらなること、世になく、／家のうちは暗き所なく、／光り満ちたり。／翁、心地あしく、苦しきときも、／この子を見れば、苦しきこともやみぬ。／腹立たしきことも慰みにけり。／

翁、竹を取ること久しくなりぬ。／勢ひ猛の者になりにけり。／この子いと大きになりぬれば、／名を、御室戸齋部の秋田を呼びて、付けさす。／秋田、なよ竹のかぐや姫と付けつ。／このほど三日、／うちあげ遊ぶ。／よろづの遊びをぞしける。／男はうけきらず呼び集へて、／いとかしく遊ぶ。／

世界の男、／あてなるもいやしきも、／このかぐや姫を、得てしがな、／見てしがなと、／音に聞きめて惑ふ。／